

## 動物園教育理論の発展に向けて

### 保全心理学の視点導入の提案

並木美砂子\*

\*帝京科学大学, 〒409-0094 山梨県上野原市八ツ沢 2525

E-mail : misako-namiki@ntu.ac.jp

#### 要旨

動物園が持続可能な社会を目指し、保全教育の場として機能していく上では、訪れる人々が楽しみを享受しつつも、その楽しさをもたらしてくれる動物たちへの深い理解や配慮を促すなど、人間と動物たちとの関係について深く考える機会を頻度多くもつことが必要と思われる。その上で、人々が、実際に保全につながる生活や活動を、様々な場面で日常的に行うことが欠かせないとする。本論では、この「実際に行動する」上での心理を扱う保全心理学の目指すところを紹介し、保全活動や保全意識と人々の心理の関係について考えることとする。とくに、基本的には、来園者をサービスの対象として見るのではなく、「保全活動参加者」として意識して位置づけることを提案する。

#### はじめに

動物園や水族館の社会的役割のひとつである「生物多様性保全」は、持続可能な社会とはどういうものかを考え、実践者を増やしていくことによって成し遂げられるものである。比較的安全な戸外のリクリエーションの場として、さまざまな人々によって利用されている動物園や水族館で、こうした持続可能性について知識を持ち行動できる人々をどのように増やすかについて、動物園教育の目標としても十分に考えていくべきことと思われる。

本稿の主な目的は、その実践にあたり、「保全心理学」の果たす役割を考え、その適用の実践的な可能性を検討することであるが、さらに、推進する上での「参加モデル」も提唱する。

「保全心理学」は、環境心理学やコミュニティ心理学などの分野と関わりながらまれてきたが、その背景について触れ、多様性保全と持続可能な社会

づくりの実践にどう寄与できるかを検討する。同時に、実際に保全活動をすすめていく上で先進的なとりくみをしている場合の、実践のベースとなっている考え方についても触れる。なお、理論の適用にあたり、動物園や水族館の利用者を、「サービスの受け手」としてみるのではなく、「保全への参加者」として位置づけることの可能性を提唱する。

#### 保全活動を広げる上での 社会科学と保全生物学の共同

保全を目的とした社会科学と保全生物学との共同が重要であるという認識に立って、2003年以来、700人以上の自然科学者と社会科学者と現地での実践家を巻き込むシンポジウムやのコラボレーションの試みが続けられている (Schultz, 2011)。また、社会科学との結びつきのもう一つの例として、本論でもとりあげる「保全心理学」研究者との共同の取り組み

みがみられるという。大事なことは、保全に向かう「心理」つまり、実際に、行動しようという意志を持ってその人自身が行動変容を自覚的に起こすことにあると筆者は考える。保全生物学などの自然科学が現状について広く実態を知らせつつ、人々は何を契機に保全の活動に実際に関わるのかを追究する、社会科学のひとつとしての「心理学」が、この「保全心理学」なのだと言えよう。

そうした動きの象徴として、Schultz(2011、前述)は、全米心理学協会の第34部門が、「環境、人口、そして保全心理学」という名称になったことを紹介している。

概略的に言えば、心理学者はそれぞれ個人の「幸せ」感について、社会的な環境（家族や仲間など）の与える影響に関心があり、保全学者は、どうしたらその活動に人々に関わる気持になるかに関心がある。自己効力感がたかまる形で（何をやっても無駄・・・ではなく）、具体的にどのような行動が効果を及ぼすのかについて知らせることが大切なのである。他方、保全生物学者は、保全することの人間にとって意義についても深く考えていくことの必要を主張している。したがって、今後は同じプロジェクトの中で両方の領域の研究を共同ですすめていくことにより、サステナビリティへの自我関与と保全が追究できると思われる。

### 環境心理学から保全心理学へ

ところで、心理学の中でも「環境心理学」の領域では、環境のどのような要素が人の気持や行動に影響するかが扱われてきた。つまり、人々がどのような環境を好み、あるいは好まないかを物理的なファクターと関連させたり、あるいは精神的な安定感（安らぎなど）を得られる環境はどのようなものかを検討するというものであった。どのような労働環境が生産性をあげるか、安らぎを得られる環境とはどのようなものかの追究などは、環境心理学のテーマとして我々も想像しやすいものである（Kaplan、2011）。この分野では、当然、自然環境にも目が向けられ、誤解をおそれず単純化して表現すると、「豊かな自然

にふれることで、ストレス回復や癒し効果があるのではないか」というとらえ方が主流となり、人々の「癒される感覚」とはどのようなもので、その主観と環境との関係性が注目された（Kaplan,1993）。

その後、自然環境保全や生物多様性保全に「取り組もうとする意思」はどのように生まれるかを追究する研究が、環境心理学の分野にも登場する。芝田（2013）によれば、自然と人間の関係性について心理学的な観点からの研究は、①自然の好みについての研究 ②自然との心理的繋がりと環境保全への実際のかかわりの関係 ③自然体験がもたらす身体的な効用に関する研究の3分野に大きく分かれている。この中で、②の分野は比較的新しいとされ、自然との心理的繋がりの強さと、環境配慮型行動との関係について関心が高まっているという。さらに最近では、持続可能な社会への志向を目指す心理的状态がどのように形作られてくるのか、といった、行動をもたらす動因の心理について関心が高まっている（神崎、2011）。

こうして、「どのような環境が人々の心理的状态に影響を与えるのか」という観点から人間の心理を理解するという性格をもっていた環境心理学は、「どうしたら持続可能な社会作りのために行動できるようになるか」、あるいは「その障害は何で、それを取り除く手段を人々の心理的状況から考える」という方向を持つようになった。この領域での自己リフレクション(振り返り)を手がかりにした研究では、「子ども時代の自然とのポジティブな接触が認知的効果を高め、環境へ配慮ある行動に結びついており、また、自己リフレクションを手がかりにした調査によって、子ども時代に自然と接触し、何かポジティブな記憶をもっている場合は、環境への配慮的態度をもっている(要約は筆者)」という報告もある（Collado and Corralize、2015）。

ここで筆者の考えを述べるなら、「自然のもたらす心理的効用の研究分野」は、動物園での動物介在教育や介在活動など、実際に小動物に触れることの効用を検討することを思い起こさせる。

一方、最近の研究では、人々の保全活動に関わるなどの「行動変化」については、実は、メディアや

SNS からの情報が契機となるよりも、身近な他者や友人からの誘いが有効であることがあきらかにされた(原田・村松, 2013)。

さらに、個人の保全行動を促すためには、身近な人の行動にふれることに加え、生態系サービスのうち特に、「文化的サービス<sup>(註1)</sup>」からの恩恵に対する知識を高めることも重要となる(今井ら, 2014)とされるが、自然から受ける恩恵を身近な文化的な経験と深く結びつけることは、文化の多様性に対する理解の深まりを意味し、それらは保全活動の契機になると思われる。

### 動物園や保全施設における 保全教育のテーマと実践例

では、保全活動従事を目標においた、動物園でのとりくみはどうであろうか。イギリスのジャージー動物園は、絶滅危惧種の繁殖を積極的にすすめ、その展示にも力をいれているが、同時に、中南米、マダガスカル、モーリシャスなどから、保全活動に携わる若い人々を招聘して毎年セミナーを開催している。そこでのテーマは多岐にわたり、保全のための飼育管理等の技術的なことの前に、

- ①Decision making 目標設定
- ②Conflict management 利害の調整
- ③Cross-cultural sensitivity 異文化受容
- ④Group dynamics グループダイナミクス
- ⑤Active listening よい聴き手になる条件
- ⑥Consensus building 共通の土台構築

などを学ぶのである。また、保全活動推進には、他の人々と何らかのアクションを起こす上での、「ファシリテーション」能力と「コミュニケーション」能力が必要だとされ、そのスキルアップのためのワークショップも行われる(Durrell Organization のHP 情報)。

日本でも、たとえば、コウノトリ野生復帰に伴う取り組みの上では、繁殖や保全の技術的な研究は当然ながら、地元の人々との継続的なセミナーや利害関係者等との対話の機会を多数設けるなど、保全活動を推進する上での共同の人間関係作りが重視され

ているが、たとえば、菊地(2015)は、現地滞在をしつつ、その土地の人々の語りを聞くという手法を通じて、野生復帰という事業の進展に伴う、さまざまな人間関係について述べており、そのプロセスにおける人々の心理状況変化を追っている。

あるいは、エコツアーによってどのような心理的变化が参加者や実践者にうまれているかなども、この領域の研究内容となっている(文野 2008)。

このように、実際に保全活動を推進する上では、さまざまな考え方や立場の違いを認め合った上で、共同することが必要であるが、「自然や動物を自分たちとどのような関係としてみるか」には、割り切れないさや各自の野生動物観そして自然観による多様な感情の存在が影響しており、その違いや多様な見方を相互に知ること、こうした心理的状況変化をたどる対話の役割と言える。

### 保全心理学と動物園のとりくみの関係

Claton ら(2013)によると、保全心理学は、現在大きく分けて2つの関心領域をもつに到っている。ひとつは、人々がどのように自然に対してふるまうのか、サステイナビリティに向かう行動変化はどううまれるのかであり、もうひとつは、人々は実際、どのように自然への配慮を行いケアをしているのか、つまり環境倫理的態度は具体的にどのように表れているかである。また、著者らによると、動物園での人々の行動を保全心理学の観点からみると、人々は園内の植物を含む自然にポジティブな感情をもち、かつ、さまざまに動物との個人的接点を見いだそうとしており、その意味で、保全活動は十分に各人の生活スタイルと関連させることができると主張している。さらに、さまざまなサインの利用状況から、これらをきっかけに保全メッセージ理解がすすむ可能性にも触れている。とりわけ、野生生物派生物等の貿易品展示が保護への意識の高まりをもたらしていることを見いだした。

こうした保全心理学の研究の観点から動物園や水族館が学ぶことは、来園者それぞれの行動や発せられることばを、「保全とどう関連するか」という観点

から常に気を留めていくことであり、展示のなかでも、サインをはじめ、さまざまなツールが、施設側からすると「動物についての説明や解説」であっても、それらのメッセージについて、積極的に自分の日常生活と関連させて考えようとする態度がみられることにも、確信をもつということである。そして、散りばめられたちょっとした行動やことばに見いだされる「保全とのつながり」を、その来園者たちと分かち合うことだとも言えよう。

シカゴのブルックフィールド動物園では、人々がどうしたら保全に関心をもちアクションを起こすようになれるかを研究する上で、「保全心理学」研究をとりいれている。その主なリサーチクエスションは、以下の通りである（シカゴ動物学協会 HP より）。

- ・人々は直接的な動物との関わりの意義は何か
  - ・自然に対し、大人と子どもはどう関わりをもっているか。
  - ・共感性や生態的感覚、場のもつ意味への関心はどう発達するか
  - ・何が保全活動にかかわる動機になっているか
- こうした観点を持ちながら、来園者の言動や行動を注意深くみることを重視している。
- 保全心理学の特徴は、「行動変化」を重視するとともに、その変化がその人の心情としてなぜどのように起こったかの「契機」と「プロセス」を知り理解することも重視されているという点である。

### 結論に替えて 保全活動への「参加」概念モデルの提唱

動物園や水族館を運営する側が、来園者の行動に保全活動推進の「種（たね）」を見いだす試みを意識的に追究することが、無意識に行われている個人の行動や考えを保全に位置づけていくことになると思われる。その意味で、場面毎のセンシティブティを身につけていくべきなのではないかと言いたい。

ここで筆者は、保全活動へのとりくみを推進する上で、「参加概念」の構築を呼びかけよう。

保全の目標に対して、少なくとも動物園利用者を「参加者」として迎えるという主張である。

そのイメージは図1に示した。利用者は、サービスの受け手ではなく、入園した時点で、あるいは利用した時点で「参加者」「参与者」としてみる、ということである。

動物園や水族館という公共の場を「楽しみ」のために利用しているにしても、何かを発見しつながりを見いだせば、それは保全の目標への接近という意味において、「参加」として位置づけてみるということを推奨したい。

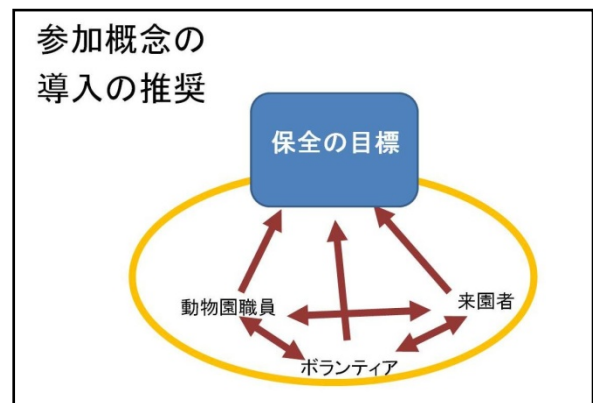


図1 保全活動への参加者として人々をみなす「参加概念」のモデル図 職員・来園者（利用者）・ボランティア等のさまざまな人々が相互理解を深め、保全という大きな目標②に向かって協働しているというイメージ

このモデルの有効性は、動物園や水族館での保全生物学と保全心理学のコラボレーションを実践していく上での出発点になるという点である。

同時に、この図のように、関与する人々は、職員と来園者のみならず、たとえばボランティアや施設外から支援する人々も含まれる。ひとつの施設だけで考えることなく、一般的に動物園利用者水族館利用者あるいは支援者といった大勢の人々の切れ目のない集団を想定している。

前述の、人々の言動や行動の中に、保全活動の契機やプロセスを見いだすという保全心理学の目標は、こうした「保全への参加者として来園者一人ひとりと動物園水族館側の人々、そしてボランティア等の支援者を位置づける」ことによって、全体として同じ目標を見つめる人々の「保全への参加の度合いや特徴」を見定めていくことと読み替えることも可能

となるのではないだろうか。社会科学における「参加論」を適用するこの提案についての理論的実践的検討は、別の機会に譲ろう。

## 引用文献

Clayton,S., Litchfield, C. , Geller, E Scott. (2013) Psychological science, conservation, and environmental sustainability, *Front Ecol Environ* 11(7): 377–382.

Collado ,Silvia and Corraliza José A.(2015) Children’s Restorative Experiences and Self-Reported Environmental Behaviors, *Environment and Behavior* 47: 38-56.

原田知佳・村松陸雄(2013) 大学生の社会貢献に対する意識—テキストマイニングによる自由記述の解析、*環境心理学研究* Vol.1No.1:71.

文野 洋 (2008) エコツアー体験の語りにみる環境の学び、*教育心理学研究* 56:498-509.

今井葉子・角谷拓・上市秀雄・高村典子(2014) 市民の生態系サービスへの認知が保全行動意図に及ぼす影響：全国アンケートを用いた社会心理学的分析 *保全生態学研究* 19(1), 15-26.

神崎宜治 (2011) 環境倫理学のための道徳心理学、*実践哲学研究* 33号：128-154.

Kaplan, Rachel (1993) The role of nature in the context of the workplace , *Landscape and Urban Planning*, 26 : 193-201.

Kaplan, Rachel (2001) The Nature of the View from Home: Psychological Benefits, *Environment and Behavior* 2001:507-541.

菊地直樹 (2015) 方法としてのレジデント型研究. *質的心理学研究* 14 :75-88.

Schultz, P. W. (2011) Conservation Means Behavior, *Conservation Biology* Volume 25, No. 6: 1080–1083.

芝田征司 (2013) 自然環境の心理学 — 自然への選好と心理的つながり、自然による回復効果 — *環境心理学研究*第1巻第1号：38-45

### 【ホームページ】

ジャージー動物園 (Durrell Organization)  
<http://www.durrell.org/training/courses/facilitation>

-and-communications-skills/(2015年5月28日閲覧)

CZS シカゴ動物学協会 HP

<http://www.czs.org/Centers-of-Excellence/Center-for-Conservation-Leadership>(2015年5月29日閲覧)

### 【註1】

文化的サービスとは、環境省の生物多様性センターによれば、「観光やレクリエーション、科学的知識、文化や芸術へのインスピレーション、自然景観」など、国連の生物多様性評価活動で分類された生態系サービスのひとつである。